

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析

小坪小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

【 国語 】

《言葉の特徴や使い方に関する事項》

- 『好み』と『暑い』の漢字を書き表す設問では、『好み』が正答できた児童が83.6%と全国の正答率を2%上回っていたが、『暑い』を正しく書けた児童は56.4%と、全国の正答率を15%以上下回った。『あつい』のような同音異義語がある漢字については、文章の前後から意味をしっかりと把握させ、どの漢字が適切なのか判断する練習を重ねていく必要がある。

《情報の扱い方に関する事項》

- 「話し合いの記録」の書き表し方を説明したものとして適切なものを選択する設問であったが、本校児童の正答率は69.1%で、全国の正答率、及び神奈川県の前年度より6%ほど上回った。

《我が国の言語文化に関する事項》

- 『かわや』という言葉为例に、世代によって言葉の違いに気付くかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は72.7%で、全国の正答率8%ほど下回った。知識や常識として知っているかどうかということもあるが、知らなくても文章の内容から読み取る力も付けていきたい。

《話すこと・聞くこと》

- 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり、関係付けたりして、伝え合う内容を検討することが出来るかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は45.5%で、全国の正答率、及び神奈川県の前年度と比較し、8%ほど下回った。似たような選択肢が多く、選択に戸惑った児童が多かった。設問の意味をしっかりと理解してから正しいものを選ぶ習慣を付けるようにしたい。

《書くこと》

- 図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は87.3%で、全国の正答率を5%以上上回った。ただし、選択式の設問にも関わらず、無回答率が全国平均よりも1%上回り1.8%あった。途中で諦めず、最後まで考えて回答する力を養いたい。
- 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができるかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は60.0%で、全国の正答率を5%以上下回った。また、選択式の設問にも関わらず、無回答率が全国の割合よりも1%上回り1.8%あった。文章の構成についてどのような工夫をしているのか理解を図りながら丁寧に読み解く力を培っていくことが大切である。

《読むこと》

- 文中の「話し合いの様子」の児童の発言の内容を資料から適切な選択肢を探して空欄を埋める設問では、本校児童の正答率は49.1%で、全国の正答率よりも8%以上上回った。しかしながら、正しい選択肢を選べた児童の割合は半数以下であるので、「読み」の指導は強化していきたい。

- 資料を読み返して言葉の変化について自分が納得したことを、他の3つの資料に書かれていることを理由にしてまとめて書く設問では、本校児童の正答率は50.9%で、全国の前年度よりも5%以上上回った。また、記述式の設問のため、無回答率も14.5%と二桁の割合であった。目的に応じ、文章と図表などを結び付け必要な情報を見付けることを苦手としている児童が多いため指導に力を入れていきたい。また、記述式の設問に対しても苦手意識の克服を図っていく。

《児童質問紙 国語に関する質問》

「国語の勉強は得意ですか」の質問では、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答をした児童を併せると75.9%であり、全国の前年度61.4%と比較すると約15%近く高い値であった。また、「国語の授業の内容はよく分かるか」の質問でも、83.7%と、全国の前年度よりも1%ほど高い値であった。しかし、「国語の勉強は好きですか」に「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答をした児童を併せると53.7%であり、全国の前年度58.3%と比較すると約5%近く低い値であった。児童にとって「得意」と「好き」では違うようであるので引き続き指導の工夫・改善を模索し「好き」の割合を高めたい。

「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」の質問では、「当てはまる」と回答した児童は、59.3%で、全国の前年度55.9%より約3%高かった。児童は、国語の勉強が好きな割合は全国平均より低いが、国語の授業の大切さや将来の必要性についてはよく理解している。また、「読むこと」の区分で目的に応じ、文章と図表などを結び付け必要な情報を見付けることをみる設問で全国の前年度よりも低かったが、「児童質問紙の調査」でも、「当てはまる」と回答した児童は全国の前年度よりも5%以上低いことが分かった。児童の苦手意識の克服から始める必要性が感じられた。「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題があり、それらの問題について、どのように解答したか」という質問は、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童は、全国の前年度よりもやや高く81.8%であった。また、解答時間については、「時間が余った」と回答した児童の割合は43.6%で、全国の前年度の割合38.0%を5%ほど上回った。

【 算数 】

《数と計算》

- 2022年の全国のプロッコリーの出荷量が2021年のプロッコリーの出荷量の約何倍かを、棒グラフから読み取って選ぶ設問では、本校児童の正答率は85.5%で、全国の前年度78.7%よりも7%近く上回った。
- 示された資料から、必要な情報を選び、ピーマン1個とプロッコリー4個の重さを求める式と答えを書く設問では、本校児童の正答率は87.3%で、全国の前年度74.5%よりも13%と大きく上回った。数量の関係を式に表し、計算することは90%近くの児童が理解できていた。
- 数直線上に示された数を分数で書く設問では、全国の前年度よりも8%以上上回ったが、正答率は43.6%と50%以下である。数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数のいくつ分として捉えるかが多くの児童で曖昧な理解であったので、指導を強化していきたい。

《図形》

- 台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は58.2%で、全国の前年度50.2%よりも8%上回った。
- 五角形の面積を求めるために、五角形を二つの図形に分割し、それぞれの図形の面積の求め方を書く設問は、本校児童の正答率は49.1%で、全国の前年度37.0%よりも12%以上も上回ったが、実際にきちんと理解できている児童の割合は半数を切っているため、基本図形に分割することができる図形の面積の求め方について再度基礎から指導していきたい。

《測定》

○はかりが示された場面で、はかりの目盛りを読む設問では、本校児童の正答率は61.8%であった。全国の正答率をやや上回っているが、はかりの目盛りを読むことは日常生活の中で生かされる大切な技能であるため、正答率をさらに上げていかなければならない。今後も重点的に指導に取り組んでいく。

《変化と関係》

○10%増量したつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選ぶ設問では、本校児童の正答率は49.1%で、全国の正答率40.9%よりも8%以上も上回った。この設問では「10%増量」の意味を解釈し、「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる内容であるが、半数の児童は理解できていたようだ。しかし言い換えれば残り半数は理解が不十分であるため、個別の手立てが必要であろう。「割合」の領域では「%の意味」や「～倍」の意味などで躓く児童が多いため時間をかけて理解を図っていききたい。

《データの活用》

●目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる設問は、今年度全ての設問の中で、最も正答率が低く、本校の児童の正答率は20.0%であった。これは、全国の正答率31.0%、神奈川県の子の正答率30.0%より10%も低い割合であった。記述式の解答に慣れていない児童が多いという理由もあるが、目的に応じたグラフの選択が正しくできていないことが主な原因であろう。グラフの読み取り方や目的に応じたグラフの選択などについて指導法を工夫・改善するなどし、児童への理解の定着を図っていききたい。

《児童質問紙 算数に関する質問》

今年度本校では全質問数16問のうち、半数以上の9問で全国正答率を上回っていた。ところが、「算数の勉強は好きか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて53.7%で、全国の57.9%より4%以上下回った結果となった。ただ、「算数の勉強は得意ですか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて66.7%で、全国の60.3%より6%以上上回る結果であった。また「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」という設問には、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は約90%で全国の割合とほぼ同率であった。本校では比較的に児童の多くが算数が得意であり、将来必要なものだと思っているが、記述式の問題や応用問題、探究や発展的な問題には弱い児童も多いため、今後も実生活と関連づけながら、一層児童が興味・関心をもって算数の授業に取り組むことができるよう、指導を工夫していききたい。

一方、「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できているか」という設問には、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は併せて74.1%で、全国の83.3%よりかなり低く、決まった公式を、決まった方法で使い、解くことも大切であるが、「はかりの目盛りを読む」「グラフを正しく読み取る」など日常生活と密接に関わっている単元などは、前述したが、できるだけ具体的に身近な事例を提示しながら指導していく必要があるだろう。また、「公式を活用」する力を伸ばすには、計算や文章題など、自分なりに工夫して解く方法を考え、発表する学習も多く取り入れていきたい。

「今回の算数の問題では、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題があったが、それらの問題について、どのように解答したか」という設問では、「書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中で諦めたりしたものがあつた」と「書く問題は全く解答しなかった」と答えた児童の割合は25.4%で、全国の割合23.9%より若干高かつた。これからは、より一層最後まで諦めず取り組む粘り強さが求められる。また、そのための指導も必要である。

解答時間については、「やや足りなかつた」、「足りなかつた」と回答した児童は、全国の割合より低かつた。

【 理科 】

《「エネルギー」を柱とする領域》 4問中全国の正答率を上回ったのは3問であった

○4問中3問で全国の正答率を上回っていた。特に電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いているかどうかをみる設問では80%近くの児童が理解できていた。授業でも熱心に実験に取り組む児童が多かった。実際に実験を通して自分の目で確かめることで知識の定着が深まる。

《「粒子」を柱とする領域》 6問中全国の正答率を上回ったのは1問であった

●特に、海面水位の上昇について、水の温度による体積の変化を根拠に予想しているものを選ぶ設問では、本校児童の正答率は55.4%で、全国の正答率65.6%よりも10%以上、また、水の温まり方について、問題に対するまとめを言うために、調べる必要があることについて書く設問でも、本校児童の正答率は39.3%で、全国の正答率50.6%よりこちらも、10%以上低い割合であった。特に後者は短答式で解答するため、苦手とする児童が多いのか正答率は40%を切ってしまった。また、無回答率も14.3%と、全国の無回答率6.1%の倍以上であった。水の温まり方については本校では苦手と感じている児童が多く、指導方法を工夫するなどし、知識の定着を図っていきたい。

《「生命」を柱とする領域》 4問中全国の正答率を上回ったのは2問であった

○顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いているかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は57.1%で、全国の正答率45.6%よりも10%以上も上回った。普段の授業の中で、顕微鏡を用いて観察する機会を多くもち、児童もその操作に慣れているようだ。但し、60%を切っている点は少し気になるところである。

●レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができるかどうかをみる設問では、記述式の設問ということもあり、本校児童の正答率は16.1%で大変低い割合であった。なお、全国の正答率も29.9%と低いが、本校は全国よりも10%以上も下回った。種子の発芽条件についての基礎基本はしっかりと理解させるよう指導するとともに、記述式の解答にも慣れるよう繰り返し練習をしていく必要がある。

《「地球」を柱とする領域》 6問中全国の正答率を上回ったのは2問であった

○水が陸から海へ流れていくことについて、水の行方と関連付けているものを選ぶ設問では、本校児童の正答率は66.1%で、全国の正答率60.9%よりも5%ほど上回った。

●赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる設問では、本校児童の正答率は48.2%で、全国の正答率60.5%より10%以上低い割合であった。地学分野は装置の準備などなかなか実験で確かめる機会が少なく、知識の習得が教科書中心となってしまうが、設問をよく読むことで解答を導き出せることもあるので、最後まで問題文や説明文をしっかりと読む習慣をつけさせたい。

《児童質問紙 理科に関する質問》

「理科の勉強は好きですか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて83.4%で、全国の80.1%よりやや上回った。さらに、「理科の勉強は得意ですか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて87.1%で、全国の78.4%より大きく上回った。本校児童は概ね理科の学習に対して抵抗感はないようである。しかしながら、「理科の授業の内容はよく分かるか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて87.0%で、全国の88.9%より下回っていた。また、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」の質問では88.8%が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答したが、「普段の生活の中で活用できているか」の質問では、79.6%であった。児童は、現在受けている授業が普段の生活の中で役立っていることは感じにくい、将来的には役立つことを学んでいるようである。しかし、「将来、理科や科学技術に関する職業に就きたいか」という質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば

当てはまる」と回答した割合は合わせても 40.8%と半数以下であった。その一方、「観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えているか」「問題に対して答えがどのようになるのか、自分で予想（仮説）を考えているか」という質問では、いずれも 80%を超える児童が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した。今後は、児童が興味・関心をもって主体的に学ぶ工夫を積極的に授業に取り入れていくことで、理科好きな児童が増えてくることを期待したい。なお、80%以上の児童が、「解答時間は十分であった」と答えていた。

◎児童質問紙の結果 特徴的なことや課題と考えられること等

子ども自身に関する質問で、「朝食を毎日食べているか」について、「当てはまる」と回答した児童の割合は、90.7%で、全国、神奈川県よりもやや高い割合であった。しかし、「毎日、同じくらいの時間に寝ているか」についての質問では、「当てはまる」と回答した児童は 27.8%で、これらは全国、および神奈川県を 10%も下回った。また、昨年度の本校 6 年生（32.1%）と比較しても低い割合であった。食事の習慣は正しく身につけているように感じるが、就寝時間がまちまちであることなどから、引き続き家庭と協力しながら改善を求めている。

次に、「将来の夢や目標をもっていますか」という質問では、「当てはまる」と回答した児童は、丁度 50.0%と全国の 60.7%より 10%も低かった。しかし、「人の役に立つ人間になりたいか」という問いでは、75.9%の児童が「当てはまる」と回答しており、全国の 73.7%よりは 2 パーセントほど高かった。この時期の児童は、将来の目標はまだ決まっていないが、将来は何か人や社会の役に立ちたいと考える児童が比較的多いという傾向が伺えた。

学校生活に関して、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」という質問では、「当てはまる」と回答した児童が 68.5%であり、全国、神奈川県より 10%以上低い割合であった。また、「人が困っているときは、進んで助けていますか」という質問で「当てはまる」と回答した児童は 48.1%と半数以下で、しかも、全国より下回っていた。本校が願う子どもの育ちの姿の一つとして、弱者の気持ちに寄り添う、人の悲しみや苦しみを自分事として感じ、手を差し伸べてあげられる人になってほしいことなど、本校では重点教育目標として「心の教育」を挙げているが、期待した結果には程遠かった。引き続き、道徳教育等「心の育成」に一層力を入れていくとともに、弱者に寄り添う思いやりの心を養うことを目指し最大限努めていきたい。

地域や社会参加に関して、「地域や社会をよくするために、何かしてみたいことはあるか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童は 94.5%おり、全国の 81.2%や神奈川県の 82.6%より 10%以上上回っており、小坪という地域性や高学年の総合の授業で、地域の課題を取り入れた活動を率先して行っている成果であろう。地域に貢献したいと考えている児童は比較的多くいるようである。

「5 年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表できたか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合は 75.9%と、全国 68.6%よりも 7%以上上回っていた。さらに、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができたか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合も 92.6%おり、全国 84.9%より 8 パーセント近く上回っていた。本校では、昨年度まで、市の委託を受け、総合的な学習の時間や生活科の授業を中心に主体的・対話的な活動を多く取り入れながら、研究を推進しており、これまでの取り組みが実を結んできたと言える。今後も実践を積み重ねていきたい。

また、本校では、児童一人に一台の端末（chromebook）を配布し、日々 ICT を積極的に活用した授業を進めている。「授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用したか」の質問では、「ほぼ毎日」と回答した児童は 83.4%と全国 46.7%よりも 40%近く上回った。また、「学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を活用することについて、次の

(1) ～ (7) のことはどのくらい当てはまるか」(1) 自分のペースで理解しながら学習を進める。(2) 分からないことがあった時に、すぐ調べる。(3) 楽しみながら学習を進めることができる。(4) 画像や動画、音声等を活用することで学習内容がよく分かる。(5) 自分の考えや意見をわかりやすく伝える。(6) 友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる。

(7) 友達と協力しながら学習を進められる。のうち、「とてもそう思う」と回答した児童は、(3) の項目を除き、全ての項目で全国の割合を上回った。また、「とてもそう思う」と回答した割合を高い順が並べると「(2) 59.3%→(4) 57.4%→(6) 50.0%→(7) 48.1%→(1) 42.6%→(5) 40.7%→(3) 38.9%」であった。引き続き、ICT の様々な活用を模索していきたい。

◎調査の結果を受けて、今後の指導改善に向けて学校として取り組むこと

①いじめの根絶に向けて

「いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思うか」という質問では、9.3%の児童が、「どちらかと言えばあてはまらない」また「当てはまらない」と回答しており、これは全国の値 2.8%及び神奈川県 の値 2.9%を大きく上回っている、今後もしじめの根絶に向け、粘り強く指導していきたい。そして、全児童が「いじめは絶対に許さない」という意識をもつようになるまで、引き続き、道徳教育の充実等を一層進め、「いのちを大切にする授業」「友だちを大切にしたり、人を思いやる気持ちをもたせたりする授業」を多く取り入れ、いじめ・暴力の未然防止や早期発見・早期解決を目指す。

②支援教育の一層の充実に向けて

今年度も複数の教育相談コーディネーターが役割を分担しながら、相談業務を行い、児童指導支援部や管理職、場合によっては巡回スクールカウンセラーを交えて、きめ細やかなケース会を開いている。また、定期的に校内支援委員会、支援会議を開催したり、必要なデータを校務用 PC の暗号化フォルダに入れたりし、教職員全体で支援の必要な児童についての情報共有を図っている。しかしながら、児童質問紙で「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の問いで、「あてはまらない」と答えた児童の割合が 9.3%と全国の割合 8.8%より多いことや、軽重含め、新たなケースも増加していることから、一次支援を重点的な柱とし、支援教育の一層の充実を図っていく。

③校内研究の推進に向けて

本校では、今年度より 2 年間、神奈川県教育委員会より道徳教育実践推進校の指定、並びに逗子市教育委員会より教育課題に基づく校内研究長期研究校の指定を受け、「道徳」の研究をスタートさせた。今年度は、「自分も人も大切にすることを目指して～他者との関わりを通して、自分の考えが深まる道徳科の授業づくり～」というテーマで研究を進めている。ところで、前述した①の「いじめの根絶に向けて」と関連するが、児童質問紙の、本校の 6 年生の 10 人に 1 人が「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」という質問に対し、「どちらかと言えばあてはまらない」また「当てはまらない」と回答しているという実態と、「人が困っているときは、進んで助けているか」という質問で「当てはまる」と回答した児童は 48.1%と半数以下であることから、児童に対し、他者への思いやりと、弱者に寄り添う態度を養わせる必要性を強く感じる。ゆえに、今年度からの研究を教職員全体で取り組み、専門の講師の指導の下、しっかりと成果を残していきたい。

④地域連携の強化に向けて

今年度より、コミュニティスクールが立ち上がり、今後益々地域との双方向による連携がさらに進んでくるであろう。今回の調査結果では、「地域や社会をよくするために、何かしてみたいと思いますか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童は 94.5%と高い値であったことから、児童は地域と積極的に関わることを欲しているようである。海や山など自然豊かな小坪地区で地域の方と関わりながら共に児童の育成を担うことが大切であると感じた。そして、学校でも「地域に開かれた学校」、「地域と協働する教員」をスローガンに地域との連携を一層強化していく。

⑤ICT 教育の推進に向けて

すでに児童一人ひとりに chromebook が配布され、様々な授業や行事等で活用を図っている。児童質問紙の「学校で受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用したか」の質問では、「ほぼ毎日」と回答した児童は 83.4%おり、児童の関心度は高い。引き続き、chromebook を使った実践事例を増やしていき、教員同士で共有を進めていく。